用言變格例

815.4
Ka323y

078668-000-9

815.4-Ka323y

用言変格例

藤原 雅澄／著

M26

DAC-2414

815.4 Ka323g

中根少武

用言變格例

藤原雅澄撰

凡て諸の用言ハ四段ヨ活らけり。四段と云ハ。第一位あ韻
かさなは
まやらわ
を一段とし。第二位い韻
きしちにひ
みいりゐ
を二段と
し。第三位う韻
くすつぬふ
むゆるう
を三段とし。第四位え韻
けせて
ねへめ
れ
を四段とすること常格ふして。萬ッの用言。大ゥの之此格

国立国会図書館

国立国会図書館 26.9.10

244901

まもろ、ハまれなり。第五位お韻こそのほもよろを まハ。右の活用なし。さて上件の證を云ま。假令バか行ふて鳴のごときハ。なかむ ゆとも云ア。なかすなかずなども云類。みなあ韻ま。下ア。下同じ。

或ハなかなむなかねなかむなかる。又古ハなかまなかと活らきさ なけとのみまて。なけまなくなけと令する意まなれり。又る例なり。下同じ。

上まこその辭あろときハなけと結べり。又なけむなけるなけどもなども云類。みなえ韻まなけと活らきさる例なと活き。さ行まて坐のごときハ。まさむましますませませとのみまて。ませよと令する意なると。まさせのさせを約めて。せといへるとあり。詞まよりて。かくニタしへまてさらくと。さならぬとあり。鳴勝去積取などを。なけかていねつめとれと云ときハ。令をる意のみかる。を坐添などハ。ませそへといふま。令をる意かると。まさせそせを約めさろとあるごとし。餘ハ上の鳴まおなじ。 と活き。さ行まて勝のごときハ。かさむかちかつかてと活き。な行まて去のごときハ。いなむいふいぬいねと活き。は行まて添のごときハ。そはむそひそふそへと活き。ま行まて積の

ごときハ。つまむ つみつむつめと活き。ら行まて取(トル)のごと
きハ。とらむ とりとるとれと活くゞごとし。かくてかさ
なはまら七行ハ。いづれの詞も。大ゝさ右の如く活(ジ)らくゝ
となれど。あやわ三行の喉音ハ。上件の例ふ異ふて。四段の
活(ハタラキ)なきハ。子細あることなり。中まもあ行ま活ゝす事ハ。二
餘まハ見當らず。こ(展)いく(悔)いう(植)ゝすう(居)はゆ(映)いゆ(愈)などいふい
うゆハ。あ行の活用まあらず。皆や行とわ行とま活けり。其

證ハ後ま
いふべし。ちゝるをゐまゝくこれ例まとゞひて。中二段(い韻 う韻)
と下二段(う韻 え韻)とのみま活く言あり。意得おゝずハあるべ
からず。摠てまわさりて第一(ハジメ)ま意得おくよしハ。まづ四段
活まてハ。第二位ま。なきまし(鳴坐)かちいま(勝去)そひつみと(添積取)
りなどいふとき。體言ふなるハ論なし。用言まても。おのづ
からちゝるることまのみいひ。第四位まなけませかていね(鳴坐勝去)
をへつめとれ(添積取)などいふときハ。おのづからちゝることま
いへることハなく。みなちゝのせよと令する意ゝるとゝ。ちゝの
せしむる意なるとの。二ゝへなることさだまりなるま。中
二段ま活く言ハ。第二位ふよきおちこひおいこりひきみ(避落戀老懲幸)

などいふハ、そべて四段活より異なることなきを、たゝせよと令する意なるふも、たゝせしむる意なるふも、よきよお（避きよお落）ちよよきさせおちさせ（避落）とやうよのみいひ、下二段より活く言ハ、第四位よとげやせはてかねを（遂痩泊兼）とめぬれすゐかど（終止濕居）いふも、おのづからたゝることよも、たゝせよと令もろ意なるよも、たゝせしむる意なるよも、そべて其位を動くことなし、これ四段活と、中二段よのみ活くと、下二段よのみ活くとの差別なり、それ中二段よのみ活きさる證を云ふ、假令（タトヘ）バ、かゝ行よて避（ヨリ）のごときハ、よきよくとのみ活き、よかむよけとていえば、過（スグ）のごときも、すぎすぐとのみ活きて、すがむすげとていえば、

和（ナゴ）のごときも、なぎなぐとのみ活きて、ながむなげとていえば、將和をバ、ながむと云ても、あしからぬごと思ゑるれど、古くハ奈疑牟（ナギム）と　さ行ふて寄（ヨス）のごときハ、よしよそと活のみ假字書せり、よさむとていえば、倡これよそよせとも常よそさらき、けバ、中二段よも、下二段よも活く言なり、なゝ下よいふべし、さ行ふて落（オツ）のごときハ、たちたつとのみ活き、おさむおてとていえば、な行ふてハ姑見當らじ、但不得（カテ）而を、可爾氏（カニテ）と假字書せること、万葉、東歌よ見えされバ、ふと見るときハ、かよかぬとも、かぬかねとも、中二段よも、下二段よも活く言ありと思べし、此ハ多バ可祢（カネ）を通して、

可尓と云るのみあり。可尓と可祢と意の異ならぬまて。四段活まも。中二段と下二段との活を。兼さるまもあらぬをあるは行まて戀のごときハ。こひこふとのみ活き。こむべし。こへと

ていたべ。乞をバこむ。こひこふこへと四段まは活うしさり。神武天皇、大御歌まは。那許波佐婆とあるも。乞さむなり。土左日記舟人の哥まは。菜錢こむとあるも。將乞あり。古今集序の尾まは。こひざらめかもとどぢめさる。これハ全く万葉廿巻まは。橘の下吹風のかぐはしき筑波の山をこひむあらめかもとあるをとりさるふて。こむざらめかもといはざるハ。今古ふりさりて。四段の活なきが故なり。

ま行まて留のごときハ。とぶみ。どむと活き。とぶまむとハいはば。倡これをとぶむとぶめとも常まてさらけバ。中二段まも下二段まも活く言なり。なは行まて老のごときハ。たいたゆとのみ活ふ下まは云べし。や行まて

き。おやむおえとハいはば。崩のごときももいもゆと活け。倡これハもゆもえと常まてさらけバ。これハ中二段まも。下二段まも活く言なり。ふふ下まは云。ら行まて懲のごときハ。こりこるとのみ活き。こらむこれとハいはば。わ行まて率のごときハ。ひきゐひきうとのみ活き。ひきむひきゐとていはず。ある類なり。その下二段まの

244991

み活きとる證を云ふ。加行まて遂のごときハ。とぐとげと
のみ活き。とぐむとぎといはゞ。佐のごときも。すくさ
すけとのみ活きて。とすかむとすきといはず
さ行ふて瘦のごときハ。やすやせとのみ活き
やさむやし
といはゞ。
さ行ふて泊のごときハ。はつはてとのみ活き。
とハいはゞ。
果も此定ふ同じ。秀のごときも。ひづひでとのみ活き。ひご
なひぢといはゞ。愛のごときも。めづめでとのみ活きて。
めさむめぢ
といはゞ。な行ふて兼のごときハ。かぬかねとのみ活き。

かなむかふといはゞ。重束なども此定あり。不得は行ふ
を可尓ともいふを。通音のみあり。活用ふあらゞ。
て終のごときハ。をふをへとのみ活き。をむをひとハゐ
えゞ。總をすぶすべ
とのみ活うすも。此定ふ同じ。譬をとふとへといふも
同じきの。假へていはゞといふ意の處を。とをバと云ず
して。とへバと云も同じ定あり。古今集序ふ。いをバ云く
といふふあらべとるふ。とをバとをいはゞして。とへ
ばと云るも。さる故なり。志のるを後ふとへバといふハ
言の活法ふうなをゞと思ひて。とはバと書るものあり。
それハ四段活の法ふのみかゝつらひて。二段活の法ある
をもらざるゞ故あるべし。さらバ「なゞらへバ又この頃や

ちのはきむなどいふをも、なぞらはバとなくてハ、活法ハ
かなてびとやせむ、但し假令をバさとひと云ることあれ
バ、譬へも、もとハさとてむさとひさとふさとへと、四段ハ活
きしも知べからば、もしさらバさとてばといてむも難か
るべきか、されど古今集序などを祖とま行ハて留のご
せむ文のふりハ、さいてむハ中くなり
ときハ、とぐむとぐめと活き。とぐまむとていはば、倡とぐ
みといへることてあれバ、こ
れハとぐみとぐむとも、とぐむとぐめとも、中二段ハも下
二段ふも活のせる言なるべきよし、上ハいへり、又止をと
めとむとのみ云て、とまむとみとていはば、覺をさむさめ
とのみいひて、さまむさみとていはざるも、この定あり、

や行ふて崩のごときハ、もゆもえと活き。もやむとハいて
もいもゆと活けることあれば、中二段ふも下二段ハも、活
ける言なるべし、又愈のごときもいゆいえと活きて、いや
むいゝとていはば、萎崩冷ら行ふて濕のごときハ、ぬるぬ
費映なども、此定ハ同じ。
れとのみ活き。ぬらむぬり わ行ふて居のごときハ、すうす
とていはず。
ゑとのみ活き すわむするとハいてば、
植飢あども此定ハ同じ。ゑる類なり、中二段
と下二段と二ゝへハ活けるハ、留をとぐみとぐむとも、と

どむとゞめとも、萌(モユ)をもいもゆともゝゆもえとも、各〻前ヨ云るごとし、かくてたのづゝらちゝのゝることヨハ、第二位ヨとゞみといひ、ちゝのせよと令をる意なると、ちゝのせしむる意ゝるとのゝかさヨハ、第四位ヨとゞめといひて、ゝちゝ、おのづゝらちゝのゝることヨハ、第二位ヨもいとれひ、ちゝのせよと令する意なると、ちゝのせしむる意なるとのゝさヨハ、第四位ヨもえといひて、わゝちし詞ゞまへなるを、やゝ後ヨハ混(ミダ)れてしゝ又寄(ヨス)のごときハ、古言ゝよしと云ること多けれバ、るべし、

よしよすとも、よすよせとも活ゝしいへる類なるべし、古言ゝよさすと云るその時ハ、よさむよさしよさすよさせと四段ヨ活ゝしこざるらめなどいへることあるそのよしたゞね、よしこざるらめなどいへることあるそのよしたゞよせを通たしこざる言なり、と思ふめれど、これもおのづゝらちゝのゝる意ヨハ、第二位ヨよしとのみいひ、ちゝのせよと令をる意なると、ちゝのせしむる意なるとのゝさヨハ、第四位ふよせといひて、ゝちゝつべき、もとの詞ゞまへなるべし、ちゝのゝるを後ヨハ、これも混(ミダ)ふなりて、差別なきゞごとくヨなれるなるべし、きよせゝどいふた、令來縁の意なれバ、そをきよしといへることたなきヨても、よしとよせと、もと差

別あるべしことを辨ふべし。又恐隱のごときは、古言は、たそりかくりといへること多ければ、たそりたそる、かくりかくるとも、たそるたそれ、かくるかくれとも、中二段よも下二段よも、活く言なるのと思へるれど、たそらくかくらくなどもいへむ、たそらむたそりたそるたそれとも、かくらむかくりかくるかくれとも、四段は活ける言なるぞ、たそらむかくらむといふべきを、たそれむかくれむと云るは、第一位を第四位は、おそれかくれといふとは、上のよしとよせとのごとき差別ありしなるべし。倡志のせよと令する意、志のせしむる意あらで、自のうへよも、物ゐるよりつきさる意のときは、おそれかくれゐどいひ、單は云はは、たそりかくりとのみ云りしなり。志のるをその差別なく用ふは、やゝ後のことなり。恐は、續紀九、巻宣命よも、「けさまをり懼理坐ことをと見え、古今集序よも、「かつは人の耳をたそり、土左日記は、海賊のたそりありゐど體言よも云て、其後もかの貫

之を學びて書るものゝハ。むそりとのみあり。隱ハ。万葉集中ゝも。むたくかくりとありて。古ゝハ皆志のり。これむそれかくれハ。單ゝ云べき言ならぬゞ故あり。志のるを後ゝハ。五音相通なれバ。りと云ても。れといひても同ぐことあり。と思ハ。古ゝゝあらば。奉をバ。志のせよと令をるときゝハ。さてまつれといへど。單ゝむさてまつりとのみ云さるを。これをもいと後ゝハ。さてまつれといひさること往こあり。これゐゞゝ相通の法を知さるのみゝて。活法を失へるゞゆゑなり。後も。もとより四段活なれバ。むくりとむくれの件の差別あることなるを。むくりと云べきをも。おくれといひさること多きハ。やゝ混れ已しあるべし。送をバ。後までもむくりといふべきを。むくれといれむざるゝてもあるべし。垂觸離あど四段活ゝても。又中二段と下二段との活をかねさるゝても。さりふりむなりと云と。されふれむなれと云とハ。件の格あるを。これらハ後ゝハ。又忘のごとりといひし事を。あらざる人も多くなれり。

きハ。わするわすれと常ゝハ下二段ゝ活けども。わすらるわすらをと活き。又萬葉廿巻二十一丁ゝ。和須良牟砥野ゆき山ゆきゝれくれどわゞちゝはゝハ已すれせぬゐもとあれむ。これもわすらむわすりわするわすれと四段ゝ活ける

言なるの。万葉三、巻卅三丁より。玉鉾の道より出立別れこゝ日より外より訓のさし。下二段活ならバ。わするゝ時なしといふべし。これ古へハ。四段よはさらきし證とをべきの。わすらむといふべきを。わすれむと云るハ。これも第一位を第四位より轉して云る變格なるべし。わすりとわすれとの差別ハ。上件より云る如し。たゝのるを古くも。わすりといふべきを。わすれとのみ云さるハ。變格を用さるなるべし。又別も。常ふた下二段より活のせども。これも萬葉四、巻十五丁より。衣手の別

今夜(コヨヒユ)從妹も吾も甚く戀むな逢よしをなみとあれバ。ヒとのらむヒとのりわのるわのれと四段より活き。亂(ミダル)も。常よハ下二段より活のせども。これも萬葉十二三十七丁より。松浦舟亂穿江(ミダルホリエ)の水尾たやみ檝取間なくたもかゆるのもとあれど。みだらむみだりみだるみだれと四段より活き。流(ナガル)も。常よハ下二段より活のせども。これも萬葉十九十二丁より。たちゝさぎち流辟田(ナガルサキタ)

の河瀬ゑ云ことあれバ。なぐらむなぐりなぐるなぐれと。
もとハ四段ゑ活きし言なるべし。各忘(ワスル)のもさらきゑ准べし。此類なか多のるべし。（但十九冊六丁ゑ。直渡日入國尓所遣和我勢能君乎とある。所遣ハつのもさると訓て。つのもさるゝともいふべき所ゑあらず。然るゑこれハ良行下二段の活ゑて。四段ゑ活くべき言ゑあらざれバ。古へハつのもさるゝの。るゝれ二言を一言ゑ約めて云るゑもあらむの。ちのらバみぐるゝ。なぐるゝなどのるゝを約めて。みぐるなぐると云るふもあるべし。さて又上の中二段活の下(ヒタ)ゑいへる避(ヨク)ハ。よかすと活のしいへることもあれバ。万葉十二三丁ゑ。あ

もの川高川避(タカカハヨカシ)紫越てきつまこと
こよひハあけぬゆうめやとあり。そのときハ。よのさむよ
のしよのすよのせと四段ゑ活きとるゑて別なり。中二段
の過(スグ)をすごさむすごしすごすをごせ。和(ナゴ)をなごさむなご
しなごすなごせと四段ゑ活のすも同じ。避(ヨキ)を俗ふよけと
いふことあるハ。よかむよきよくよけと四段ゑ活けるゑ

たあらず。よきを通音ゐて訛れるならむ。さて因ゐ云。過(スグ)を四段ゐ活く時ハ。すぐさむすぐしすぐをすぐせといふべきを。すぐさむすぐをといひ。常ゐすごさむすごをといひ。まゝ萬葉十四 三十四丁ゐ。須吾左牟(スゴサム)とも見えゝれバ。其も俗の訛ゐハ非ぢ。いづれもがを。ぐごゐ轉していへるなり。和(ナグ)をなぐさむなぐしなぐすなぐせと云ずして。なごさむなごしなごすなごせといへるも件ゐ同じ。又興(オク)をたきたくと中二段ゐハ活のすを。四段ゐ活して。たこさむたこしたこすたこせとのみいふた。これもかをこゐ轉していへるかろべし。又生(イク)をバ。いのさむいのしいのすいのせなど活のしいひて。いこさむいこしなどいたざるを。上のよのさむよのしの例ゐて。いふべきことなし。又生(イク)をバ。いのすとも。いけるとも。後までも

云て、いのむいきいくいけと四段ゟ活のしさる趣、なを古く考、合せらるゝことあるゟいと後ゟえいのむとえいたずして、いきむとのみいふて、第一位を第二位ゟ轉しさる變格なり、いきといふといけといふとハ、よくわのれさり、落(オツ)ハたちたつと中二段ゟ活ける言なるを、たとすと活のしいへることもあり、とたたゆれど、その時ハ、たとさむたたさむたさしあどいふべきを、たとすたとせと四段ゟ活けるなり、たとさむたとしといふて、これもさをとゟ轉して云るあるべし、紅葉をバ、後ゟハもみちもみつとのみ、中二段ゟ活く言とたもふゟ、古くたもみさすもみさひなどいひ、もみてるといへることもありて、もみさむもみちもみつもみてと、これたもと四段ゟ活く言あることさらなり、古今集の、つひゟもみちぬ松も見えけれも、四段活の格ゟていをバ、もみさぬといふべきを、彼頃ハえやくもみつといふゟ、四段活のあることを失ひて、中二段活の格ゟよりて云るもの留(トヾム)たとゞみとゞむと中二段ゟも活き、とゞむとゞめの、

と下二段ゟも活ける言なるを、とゞまると活のしいふ、その時ハ、とゞまらむとゞまりとゞまるとゞまれと四段ゟ

活けるなり。懲(コル)たこりころと中二段ゑ活ける言なるを。今、世ゑこらすと活のしいふその時も。こらさむこらしこらすこらせと四段ゑ活けるなり。果(バツ)もたつてと下二段ゑ活ける言なるを。たつしてと活のしいふこともあれど。その時ハ。たつさむたつしたつすたつさせと四段ゑ活けるなり。佐(多ノ)もさをくさすけと下二段ゑ活ける言なるを。さすのるとも活のしいふことあれど。そのときハ。さすのらむさすのりさすのるさすのれと四段ゑ活けるなり。重(カサ)もかさぬかさねと下二段ゑ活ける言なるを。かさなるともいへる。その時も。かさならむかさなりかさなるかさなれと四段ゑ活けるなり。終(ラフ)ハをふをへと下二段ゑ活ける言なるを。をるともいへる。その時ハ。をらむをりをるを

れと四段ヨ活けるなり。總(スブ)をぞると活のしいふも。此、
定なり。止(トム)ハとむとめと下二段ヨ活ける言なるを。とまる
と活のしいふその時も。とまらむとまりとまるとまれと
四段ヨ活けるなり。覺(サム)ハさむさめと下二段ヨ活のす言か
るを。さますと活のしいふ。その時ハ。さまさむさましさま
すさませと四段ヨ活けるなり。萎(ナユ)ハなゆなえと下二段ヨ

活ける言なるを。なやすと活のしいふ。その時も。なやさむ
なやしなやすなやせと四段ヨ活けるなり。崩冷費映(クユヒツヒユハユ)など
も其定なり。濕(ヌル)ハぬるぬれと下二段ヨ活のす言なるを。ぬ
らすと活のしいふその時ハ。ぬらさむぬらしぬらすぬら
せと四段ヨ活けるなり。居(スウ)ハすうすゑと下二段ヨ活ける
言なるを。すゑると活のしいふ。その時も。すゑらむすゑり

すゝろすゝれと四段ゝ活けるなり。植飢をうゝるゝと活の
しいふも其定なり。かくて又單音の言の得來爲寢經など
いふた。前の二音三音等の言とハ異ゝて。ゐなゞら一段ゝ
て活ける言多き中ゝ。寢ハ常ゝたぬねとのみ活けども。古
言ゝハなさむなすなせなどいへること多けれど。上一段
ゝな。下二段ゝぬねと活きし言とハ思ゐれども。なさむ

なすなせなどハ。いづれも尊者のうへを敬ひて。舒いふこ
とゝかぎりゝる事ゝて。見をめさむめすめせゝどいふ類
なれバ。自餘の活とたいさゝの異なるべし。爲ハさむしす
せと四段ゝ活のすべき言なるゝ。將爲をさむとた云ずし
て。せむとのみいへり。其たさむと云てハ聞ようらぬゞ故
ゝ。第一位のさを。第四位のせゝ轉しゝる變格なるべし。こ

れふよりて考ふるに。上に云る中二段と下二段と。二タ〳〵へに活ける寄(ヨス)も。もといよさむよしよすよせと四段に活ける言なるぞ。第一位のさを第四位のせに轉して。よせむといへる變格にもあるべし。萠(モユ)もやむもいもゆもえと四段に活ける言あるぞ。もやむを轉してもえむといひ。留(トヾム)もどまむとゞみとゞむとゞめと。四段に活ける言なるぞ。どまむを轉して。とゞめむといへるにもあるべし。居植(スウウ)も。もとたすわむするすうすゑ。うわむうゐうゝうゑと四段に活く言なるぞ。すわむうわむと云ハ。聞よからぬぞ故に。わをゑに轉してすゑむうゑむと云。すわるうわるハ。本の位のまゝにて云。又植木(ウエキ)植草(ウエクサ)などハ。自植(ラウウ)りてあるを云ことなれバ。うゑきうゑくさなど云べきを。さてた聞よからぬ

ぬゐの故に、るを云に轉して、うゐきうゐくさゐど云るものならむもゐるべうらば、居もその定なるべし、來ハかむきくけと四段に活のすべき言なるに、將來をかむとも云ずして、こむとのみ云り、其ハかむと云てハ聞ようらぬゐ故ふ、第一位のかを、第五位のこに轉しとる變格ゐるべし、けと云るも、後にハ聞えねども、古くハつうひ、のけれど、けるを、けりけると云る、そのきけもけと切れど、約言とも云べけれど、もとよりけと活く言なるゐ故に、ゐういへるまて、爲をせりせると云も、爲けり爲けると云意を、せりせるとと云る、その志けハせと切れバ、約言とも云べけれど、もとよりせと活く言ゐるゐ故に、ゐういへるまて、同例ゐり、さて人やゐれなど云ることあり、これも來けり、來ける、と云意

ちのらむ「こ」ちふよ似さり。「見」ふこ「ろ」のせこ。などやうふい
ふこ「も」。ちのあれと希ふ意なれバ。當昔も「け」といひて。「け」ち
ふよ似さり。「見」よ「け」ヨのせこなどいひしの。為をも。ちのあ
れと希ふ意のときハ。せ「と」いふと同例なり。ちのれども萬
葉十四十八丁よ。さまこすげ可利己わのせこと假字書もあ
れバ。後世人の誦ごとく。もとよりこ「と」いひしなるべし。さ

らむそのこ「ハ」。第四位のけ「を」。第五位よ轉しさる變格なる
べし。本居氏の詞の玉緒よ。源氏物語須磨よ。「こ」とゝひこな
むとある歌を引て。願ふ意のなむの上ハ。え「け」せて「ね」
へめれ「ば」よりつゞく定まりなれハ。け「ば」むといふべき格
なれども。中古以來の詞よハ。定まりの如くよハいひがさ
きこと故よ。かくいへりとやうハ。得ハう「え」。經ハふ「へ」と下二
よ詳めいへるハ。さることなり。
段よのみ活けり。又着似煮乾見射居等の中。着見ハ。ゐなゞ
ら第二位の言よて。きむみむきるみるきべしみべしなど

活く中ニ。あゞ著けるといふ意の處を。けると云ることあ
ア。そハ來けるをも。けるといふ同格なり。又敬ひていふ
とき。著賜へると云意を。けせるといひ。見賜ふ。見賜ひとい
ふ意を。めしめすなど。第二位を。第四位ニ轉して活のしい
へることあるを。自餘の似煮乾射居等ニハ其例なし　如の意を。
古言ニ奈須とも。乃須ともいひ。又似字をのとよめることと
も例どもある。その奈ハ。似の用きさるものとするときハ。

乃ハ奈の通音なることさらなり。又まねぶといふハ。真似
ぶといふ義なるを。合セ思ふニ。もと似ハ。なむニぬねとたさ
らく言の。とおもへ　乾居ハ。ひふるうと。もと中二段ニ活き
し言ニて。可乾雖乾をふべしふとも。可居雖居をうべしう
とも。などいへアしのとれもたるゝよしあり。乾をふ。居をう。と訓る古
證あれぞなり。万葉十巻十五丁ニ。靈寸春吾山之於尓立霞
雖立雖居君之隨意とあるを。タツトモウトモと訓さるも。
げにう
べなり。即ほしほすハ。ひふと約ア。をりをるハるうと約れ

り、其中、居ハ゛ゐと活きしこともありとたかゆれバ、中二段
よるゐ、下二段よゐゐと活けるこの、湯坐の名などそれなり、煮射よハ、ゐ
なぞら第二位よのみ活うして、動こしさる例なし、かふ
くその例證よたさぞひまもらずして、その規矩よのみか
かづらひてハ、推し究めがさきことたやし、そも〳〵なべ
ての言ふ、常格變格の差ありて、古へよりその變格のみ用ひ

來れり、とたもたる〻詞も多く、まさ單音の言ハ、もろ〳〵
の言ば活用の法よ准へがさく、まさその中よ、法よのみゐ
づみてハ、きたやこのよ、其たこの活こしいふ謂の決めぞさく、
さアとて又法をたなれてハ、雅俗の分なく、いとみぞりゐ
のみなりて、いふこのひなくかること、右件よ云る條〻よて
ちとるべし、さるハ其活動ける音聲の美さくして、いさ〻

のも、きゝぐろしきところのまゞらぬハ、これやゞて言靈の妙用の、その理がさきどころゝをありける、もし後ゝ人、力をくゝへて、やとよく結構（ツクリ）さらむものならましのバ、今くゝしくさどらむゝ、その法も格も、いのでのたしきゝめていれぢるべき、又立かへりて、るとつゞきとる言の例をいふゝ、たのづうら志あることをいふゝ、なのろまさ（鳴坐）

るかさるいなるそはるつまるとらるなけるませるかて（勝去添積取）るいぬるそへるつめるとれるとハ、意異なるこことさらなり、なゞ活うす例ゝ准ふるゝ、（戀老率ふどハ、中二段ゝのみ活く言ふれバ、こはるれやるひきわるゝるゞいゝず、遂痩泊などハ、下二段ゝのみ活く言なれば、どがるやさるはさるなゞいゝ　すべて第一位のあ韻の、かさゝなはまざるハさらなり、

やらわの言ふ活動あるハ、わ韻よりるゝつゞくさだまりなり、こやるさやるすわるうわるなゞも、其定なり、（但し伏居植といふ）

言、中二段活よして云時ハ、こいこゆといへど、避落戀など
をよかるおさるこれるとも云ざる例の如くなれど、こや
りこやるとも、活のしいへることあれバ、これを障をさや
らむさやりさやるさやれと四段よ活のすごとく、こやら
むこやりこやるこやれ　又萌燃萎冷崩費愈榮など、もやす
とも、活きし言なるべし、　なやす
ひやすくやすつひやすいやもやるなやるひやるくやる
すさのやすなどえいへど、
つひやるいやるさのやるといふべきを、もゆるなゆるひ
ゆるくゆるつひゆるいゆるさかゆるとのみいふえ、これ

も第一位を、第三位よ轉しる意ハ同じけれど、あやわ三
言ね、自餘の例よ異なる故あれバ、一準よていひぞさし、又
つぎよ、依(ヨス)をよしと云べき處をよせと云、「ことよせ」「よせく
み云り、きよせなど云ハ、令來依(セキヨ)の意と　るなどやうよの
きこえされバ、論なきこと既くいへり、賜(タマ)を、さまひと云べ
き處をさまへと云、續紀宣命よ、「さまへ」ゐらぎとあるなど、
さまひと云て宜しき處なり、神樂歌よ、
「みきをさうべてさべゐうて、とあるも同じく、さうびてさ
びゐうて、とありて宜しき處あり、見さまへ聞さまへゐど

云ハ、さまへよ、といふ意なれバ、論あし。留を、とゞみと云べき處を、とゞめと云。集中ニ、とゞみのねとも、とゞめかねともいひさる、其ハたのづのら留むることを得ぬ意ニしても、留まらしむることを得ぬ意ニしても、通ゆることなれバ、とゞみとゞめ、いづれニ云ても妨なし。志のるを、たのづのら志のることニも、志のせしむることニもなべてとゞめ。とのみ云ことニなれるハ、後の混淆なり。崩冷映寒等をもいひいはいこゞいと云べき處を、もえひえはえこゞえと云。燃萎崩肖費癒消越榮などもこゝ、此定なるべきの。隱恐後垂觸離などを、かくりたそりたくりさりふりはなりあど云べき處を、かくれたれたくれされふれはなれあど云。此類多し。准知べし。觸振ハ、四段活ニするときハ、全く同じ活の語と聞ゆるニ、振ハ、後までも、志のせよと令する時あらでハ、ふれとハ云ず。ふりとのみ云るを、觸ハ、古言ニ、ふりと云ることの多きをもしらで、ふれとのみ、もとよりいふことゝ後人ハ心得つめり。いづれもこれニ准べし。抑四段の活ある語をバ、たのづのらしるることハ、第二位ニいひ、志のせよと令すること、又志のせしむることニハ、第四位ニいふこと、もとの詞ゑまへあるを、その差別なく、第二位を第四位ニ轉して云ハ、變格なり。志のせよと

令する意とて、鳴坐等を、なけませなどいふときハ、鳴よ坐よといふ意よなる如し。これさゞふ第二位を第四位よ轉しさるとハ、別なることさらあり、餘のてゐへめえれも同じ。又ゐのせしむる意なることハ、かせさせさせはせませなどを約めて、けせてへめなどいふときハ、ゐのせしむることふなりて、はけハ佩せ、はせハ馳せ、さてハ立せ、つどへて集てせ、すゝめハ進ませの意なるゞ如し。餘ハ准べし。されバこれも、さゞふ第二位を第四位よ轉しさるとハ、さゞへり。混べからず。各既く上よ云り。又この第二位を第四位よ轉しいふとハ、反對なることあり。其一二をいふべし。古今集よ。「あやなくあざの名をやさちなむとあるハ、令立なむといふ意なれバ、必立せを約めて、さてといふべきを、さちとあるハ、かへりていのゞなり。名よやさちなむとあらバさることなり。又「すゝきたしなみふれる白雪とあるハ、令靡といふ意なれバ、必靡せを約めて、なべといふべきを、なみとあるハ、かへりていのゞあり。万葉集中よも、あさぢたしなべなど、いづれもなべとあるを思ふべし。されバこれらのさてなべなどハ、もとさゞふ第二位を第四位よ轉しさるとハ異よて、令立令靡の意なれバ、第四位よのみいたむをつさなしと思ひて、第二の本位よかへしていふを、かへりて非なり。とあるべし。又舒れるうへふて、言を變へて云さる格も多し。意得たくべし。日本紀武内宿禰歌よ。「あふみのみせさ

のわさりよかづくとりあなのみすぎてうぢよとらへつ。

とあるとらへつハ。とりつつの舒アとる言なれバ。必とらひ。

つと云べきを。きりを舒てきらひ。とりをのべてとらひ。かさりをのべてかさらひ。さたりを舒てさたらひなどの例なり。下くなる同じ。とらへつと云。集中七巻三十八丁よ。なげきせむ人をアぬべみ山川のさぎつ心をせのへとるのも。続後紀長歌よ。年月をせのへとじめてとあり。とあるせかへハ。せきの舒アとる言なれバ。必せのひと云べきを。せのへと云。六巻三十一丁よ。うまのあゆみたさへとじめよ住吉のきしのたまふふまほひてゆのむ。とあるたさへハ。たしの舒アとる言なれバ。必たさひと云べきを。たさへと云。十六八丁長歌よ。さゝへかさなへとある。さゝへハさゝの舒アとる言なれバ。必さゝひと云べきを。さゝへと云。續紀宣命ふ。あらへましとある。あの

らへハ。あゐりの舒ひとる言なれバ。必あゐらひと云べき
をあゐらへと云。又ませまつらへてとある。まつらへハ。ま
つりの舒ひとる言なれバ。必まつらひと云べきを。まつら
へと云。これみな第二位を。第四位ゑ變へて云とる格なり。
此類猶あり。准べし。されバ上ゑも云る如く。自他の差別なくさゞ
ゑ第二位を第四位ゑ轉しとるハ。みな變格なり。五音相通といふも

のハ別なり。さてしの變格を用ひなれとる詞の中ゑも。よしも依前
いかくりとゞ留みなど常格ゑいへる類も。たゐすゞふ寧樂
朝の頃までも。めづらしゐらねど。後ゑそれらも變格ふ
のみなれて。知人さへもまれゑなりとひ。かゝきバ古ハ常
格ゑいへること多ゐひしを。後やうくゑ失ゆきとる趣な
るも。世間の風俗ゑつれて。語のなだらむを好む理ゑて。第二

位を第四位ゟ轉すハ、上段より下段ゟ下るゟて、なごらむのさなり、つひゟ音便の類と云もの、出來む下形なるべし、さて又持以（モツ）などを、もちといふと、もてといふとの差異をいふゟ、たのづのらゐある意ゟもちといひ、ゐのせよと令する意なると、ゐのせしむる意なるとふた、もてといへアしこと、坐添（マスツ）をましそひといふと、ませそへといふとの差別と全（ラ）同じ、其證を、古事記中

巻ゟ、「いしつゝいもちうちてしやまむ、又「きこしもちをせ、下巻ゟ、「こくそもちうちしたゐね、又「神のみてもちひくことゟ、又「さつごもゝもちてこましもの、集中ゟハ一巻ゟ、「籠もよみ籠もちふくしもよみふくしも特ち、十七ゟ、「みことも」ちさちわのれなむ、十八ゟ、「やほこもちまゐでこし、二十ふ、「まそてもちなみざをのごひなど見え、續紀卅六の巻、後紀

十四の巻、續後紀一の巻等の宣命ふ、「きよきなおき心をも」ち、續後紀同じ巻に、「天の日嗣をいさゞきもち」、靈異記に、「調をもち」あそびて、字鏡に、鑒をなゝめはしに銅をもち」てかざれるそなど見えさる、これらみれたのづからおのることよいひ、集中十八に、「うまふつまに」おせもて」とあるを、おのせしむることなるに、その差別著明し、おのるを

十五に、なふものもて」ういのちつゞまし」とあるのみハ、おのせしむることふもあらず、おのせよと令することふもあらねバ、多ゞかの第二位を第四位に轉しさる變格に、もち」をもて」と云さるものなりときこゆ、寧樂朝の季つのさよりハ、これをもやゝ變格を用ひそめさるなるべし、今京より此方に、またそてもち」、或ハもち」あそびて、などいふも

ちをも。みおもてとのみ云て。もちといへることを。一ッもなくなれり。但し按ふ。これを多ぐふ第二位を第四位ふ轉して。ちをてと云さるのみもあらじ。其所以を。もてと云ふ。持而の意を帯せて。云そめさる趣ふきこゆれバなり。今の世。文章めかして物かく人。よりてをよてとかけること多し。其ハ俗言ふ。よつてとつめていふを。そのつめていふを。鄙俗なることをあ。て。其をざふのぞけバ雅言なり。とおもひとれる。其類ふもちてを俗言ふ。もつてとつめていふ。

そのつをのぞきすてゝ。もてといひ出しゝるものなり。と心得る人もあらむ。これをやゝ古き時よりいへることふて。つまる音のえゞまらぬ。なるこのの前ふいへる言なれバ。さまハあらず。さてその故ハ。持而の意ならぬところを。もてと云さることを。後までもなく。然れど今俗とても。鎗持長持子持金持。などの類の持を。もてといひさることさらふあし。これふても。持而の意を帯るところあらでハ。もてと云持而の意なるところを。もちといことなきをあるべし。

ひさることを。一ッもあることなく。みなもてとのみ云れバ

なり。此類なお外よもあるべし。不見而不聞而など云ことを。今京よりこなさ。みでき

あでなどやうよいへり。古くハ一ッもあることなし。これハ

不を省きさることあゐら。不の濁りのみを残してでを濁り。

そのでの濁音よ。不而の意をもさせさるなり。持而をもて

といふよ。やゝ似さることなり。この類。今京よりこなさの

例をいたバ。なほ許多有べし。かくて又古ことと學する人の意得たゐでた

得あらぬことあれバ。ことの因よたどろゐしおくべし。凡

そ雅言のるよつゞく言ハ。第一位のあ韻と。第三位のう韻

と。第五位のた韻とふ。かぎれるごとし。第二位のい韻と。第

四位のえ韻より。るふつゞけ云るハ。近世の俗言よて。古の

雅言よハ。ほとゝなきゐ如し。但しかぎるそしるくびるま（限 譏 縊 參）

りそのまゝるよつゞけいひて。第三位のう韻よ轉しいへ

るることハなし。又ちげるなぜるおもわでるくねるかへる（繁 詰 慍色 焉 還）

あども。第四位のえ韻より。そのまゝるよつゞけいひて。第

三位のう韻よ轉しいへることなし。そハいづれも。るよ四

段の活あれど。其中よ。第四位のえ韻よりつゞくてあれど。所

で別なり。

以上あることなれバ別ことなり。其ハ次下よいふ。かくて其證を云むとするよ。第一位のあ韻と。第五位のれ韻よりつづけさるえ。まぎる〳〵ことなけれど。例を引までもなし。雅言よ。第三位のう韻の。くすつふむゆよりつぐけいふことを。俗言よ。第二位のい韻のきしちひみいよ轉して云る例をいふよ。雅言のたくるたもみするたつるちふるうらむ。起。重。落。強。恨。

ろくゆるなどを。俗言よむきるたもむぐるたちるちひる。悔。うらみるくいるなどいふごとし。又雅言の同じ第三位のうくすつぬふむゆるうより。つぐけいふことを。俗言ふ。第四位のえけせてねへめえれゑよ轉して云る例をいふよ。雅言のうるかくるうするすつるかぬるそふるそむる。得。懸。失。捨。兼。添。染。はゆるなる〳〵すうるふどを。俗言ふ。えるかけるうせるす。馴。居。生。

てるかねるそへるそめるはえるなれるすゐるなどいふ
ごごとし。この定より て、大抵雅俗の差別を辨ずることなり。
其中に、雅言ふえるかけるうせるすてるかねるそへるそ
めるはえるなれるすゐるなどいふを、得而有(エテケル)・懸而有(カケテケル)・失而有(ウセテケル)・捨而有(ステテケル)・兼而有(カネテケル)・添而有(ソヘテケル)・染而有(ソメテケル)・生而有(ハエテケル)・馴而有(ナレテケル)・居而有(スエテケル)の約
アとる言より て、親(ウチツヅ)に屬きとるに非れば、俗言に、雅言のう韻

をえ韻に轉じとるといふことゝなり。まどふべからず。志の
らば、第二位のい韻よりるにつゞくことを、雅言にハ絶て
あることなきあといふに、然にハあらず。其證ハ、いさちる
あらびるなどを、第二位のい韻より、るふつゞきとる例な
ア。きる志知るなどの類の、單音の言に
アつゞきとるハ、論の例(キリ)にあらず。これらも、古への雅言に
なべての例に准るときハ、いさつるあらぶるあど、第三位

のう韻ふ轉して、るふつゞけいふべきふ、さる例なし、但し
重た、ちきらむ ちきり ちきる ちきれと活のにときた、るま
四段の活あれバ、のぎるなどの如く、第二位のい韻より、そ
のまゝるまつゞけいふたちらなるを、ちのむ ちき ちく ち
けと活のすときハ、中二段活のたきたくちどゝハ異あれ
ど、るをそへていふことたなし、又走(ハシル)をはしらむはしりは

しるはしれと活のすときも、るふ四段の活あれバ、そしる
などの如く、第二位のい韻より、そのまゝるまつゞけいふ
たさらなるを、はすはせと下二段ま活のすときハ、下二段
活のうするなどの如く、はもるといふ例まて、事ハ同ゞけ
れどたしるといふと、たするといふとハ、活の法格ふより
さゞへるのみなれバ、たするといふべきを變(カヘ)て、たしると

いへるよをあらば、又雑(マジル)を、まぢらむまぢりまぢろまぢれと活のをときも、まずまぜと下二段よ活のすときも、すべて上の走(ハシル)の例と同じければ、事ハ同じけれど、まぢろといふと、まずるといふとハ、活の法格ふよりてとゞへるのみなれば、まずるといふべきを變(カヘ)て、まぢるといへるよをあらず、哭泣(イサチ)を、もとハ中二段よ、いさちいさつと活きゝ言とれかゆれば、いさつると云べきを、然いへることなきハ、もとより變格よいひなれさるものならむの、但し哭泣ハ、日本紀の訓よイサツルとあれば、いさちるいさつるニタしへふいひしよもあらむの、然(シカ)きども、さしのある假字書ハ見えず、其中よ、荒をバ、古書ふあらびあらびるあらぶると活用(ハタラ)のしされば、もとより二タしへふいひなれさるなるべし、右のるを本居氏古事記傳よ、いさちるとあるハ、いさつるおりけむを、ヲ(ッ)を紇(チ)よ後よ寫し誤りさるならむと云る、理ハさ

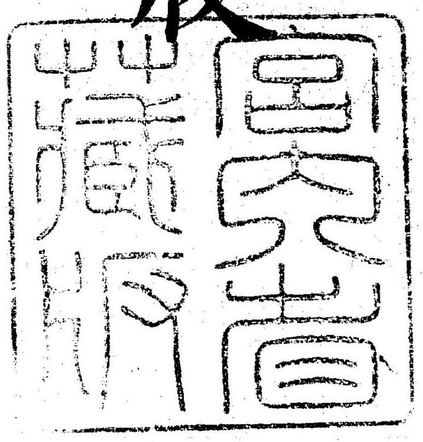
ることなれど、おして改めゞさきことなり。本居氏ハ、さゞうり音韻の法ヨ委しき人なりけれど、あゝ言霊の妙用ふハ、變化かぎりなゝりしことを思ゑざりしゑ。あゝぬことといふべし。をべて理をゞをれて、例ヨのみよらざれバ、一繫ヨなりて、行キとゝらぬところ有リと志るべし。

そも〳〵わゞ古の言語音聲の美く妙なることゑ、天地のはじめより、神の御口づゝらいひそめ給ひしことふしあれバ、さらふあざ〳〵國の駃舌などゝゑ、かけてもひとしなみヨいふべきものふあらず。されバそのもと、故ヨ轉〳〵變へていひなれさることゝ、又より〳〵ふたのづゝら轉ひ訛りさる謂など、今姑く準則を立てことわらむとをるヨ、人智もて志らるゝかぎりゑ、志らるゝことなれど、ひさぶるヨその準則のみよて、推きゑめがさきことともあるハ、そのもと、人のさくみヨ出さることならねゞなり。されゞことゞヨ、くまなくちとりつくさむことハ、

をひまをかさきわざまなむあるける。

明治廿六年十一月廿八日印刷
同　廿六年十二月一日發行

宮内省藏版



印刷人　吉川半七
京橋區南傳馬町
壹丁目十二番地